

灼光のアンチジェネシス

天草白

挿絵／桐月れおん



立ち読み版

夏海は眼前に現れた異形を愕然と見つめた。

「えっ、本多サン……!!」

驚いているのは、樹河も同じらしい。

本多は——いや、ソレはもはや人の原型を留めていなかった。

全体的なフォルムはどこかウツボカズラに似ている。

ただしその全身からは無数の触手がうねり、体長は三メートル近くある。

怪物の振るう触手が凶悪な鞭となって、四方を薙いだ。

逃げまどう生徒たちを切り裂き、跳ね飛ばす。

「ほ、本多サン、どうしちゃったんすか……ね、ねえ」

どうやら使い魔である彼にとつても、目の前の出来事は異様な事態らしい。

「ゲオオオオオオオオオオオオンッ！」

怪物は樹河の言葉も無視して、暴れ回った。

触手が振るわれるたび、負傷者が次々と増えていく。

「くそっ、やめろ！ やめろおっ！」

夏海は怪物に向かっていくが、触手に胸元を打たれて吹っ飛ばされた。

「ぐっ……」

とっさに体をひねったため、触手の先端がかすっただけだが、それでも息が詰まるよう

な衝撃に体がふらつく。

「藍原くん、無事!？」

屋上から駆けつけたのか、那々姫が夏海のもとへ走ってきた。

「俺よりみんなが……」

傷つき、倒れている生徒たちを見て、彼女は一瞬顔をしかめた。そして怪物に目をやる
と、

「あれは——魔王の魂に吞まれて理性を失っているわ」

「魂に吞まれる……?」

「魔王の魂は純粋な悪のエネルギーの塊よ。制御できなければ、その力に身も心も吞みこ
まれて——」

魔物に変わる、というわけか。

「ああなったら、もう人間じゃない。ただ破壊衝動のままに動くだけの、怪物よ。放って
おけば被害者は増え続けるわ。命を失う人だって……」

「そ、そんな!」

「あたしと契約しなさい、夏海。他に手はないわ」

魔王の魂を秘めた少女は、まっすぐに夏海を見据えた。

彼は答えを返すことができなかった。

(俺は、どうすればいいんだ)

視界がぐるぐると回る。

殺しあいは絶対に嫌だった。

ただどここうして立ちすくんでいるうちに、無関係の人が殺されようとしている。

ダメだ。分からない。答えが出せない。

「……いいわ。それなら仮契約という形でどうぞ？」

「仮……契約？」

那々姫はブレザーの胸元に手を差し入れた。制服の内部から赤い光があふれる。

抜き出した、彼女の手のひらには真紅に輝く指輪が乗っていた。

「魔王の魂の一部を取り出したわ。正式な契約には及ばないけれど、これを使えばある程度は使い魔としての能力を引き出せるはずよ」

那々姫が指輪を差し出す。

彼女が何を言っているのか、半分も理解できなかった。

それでも夏海は半ば反射的に手を差し出し、指輪を受け取る。

と、そのときだった。

「魂……モラ、ウ……」

しゃがれた声とともに、怪物の触手が彼に向かって繰り出された。

「なに……!!」

不意を突かれて、夏海は反応できない。

触手は鞭のようにしなりながら、すさまじい速度で夏海に迫り――。

「危ない！」

どん、と横から突き飛ばされ、彼は間一髪で難を逃れる。

「きやああああああつ……！」

次の瞬間、悲鳴が響き渡り、夏海はハッと顔を上げた。

枝状の触手が那々姫の両腕に巻きつき、空中に引つ張り上げている。

たちまち体をT字状に固定され、宙づりにされる那々姫。

腕や足、首筋や胸元、腹部に腰回りと、体中の至るところに巻きついた触手がギリギリ

と締めつける。

「あつ……ぐうううつ、い、痛、い……!! ああつ！」

彼女は真紅の髪を振り乱して、苦痛の叫びを上げた。

「本条! ……ぐつ！」

那々姫を助けようと突進する夏海だが、別の触手に邪魔され、そのまま廊下の端まで弾

き飛ばされた。

「げほつ、げほつ……」

鋭敏な乙女の膨らみを容赦なく搾乳されて、那々姫が悲鳴を上げた。

触手の責めはこれだけでは終わらなかつた。

男根を思わせる赤黒い先端部が伸びていき、制服の襟元や裾から内部へと潜りこむ。

「や、やめてえ……やめなさいっ……ん、くうううう、はあんっ！」

魔王候補の美少女は顔をしかめ、悲痛な声で叫んだ。

ヌメヌメとした触手が肌を這い回るのは、やはり相当気持ちが悪いのだろう。

なんとか触手を制服の外に追い出そうと上体を必死でよじっている。

触手によって拘束されている胸元が、さらに絞り上げられ、ぷるん、ぷるん、と淫靡に

バウンドした。

「ほ、本条……」

ふらつきながら立ち上がったものの、壁に寄りかかったまま、夏海は動けなかつた。

怪物に淫らな責めを受ける憧れの少女を、呆然と見つめることしかできなかった。

「離しなさいよ、このっ……あああつ、くう……んっ」

那々姫の抵抗も空しく、触手はピクともしない。

それどころか、彼女をいたぶるように、別の触手が制服の上衣をたくし上げる。

激しく体をよじったためか、淡いピンク色をしたブラジャーはカップがズレてしまつて

おり、形のよい乳房がほぼむき出しの状態でリズムカルに揺れる。



「やあつ、見ちゃ、だめえ……!!」

驚くほど白く、丸い乳房だった。

上質のマシユマロのようにプルプルと揺れ、薄いピンク色をした先端部がかすかに震えている。

粘液にまみれた触手の先端部が美しい乳首を突き、ギョツと押し潰す。

亀頭を連想させる赤黒い先端からは、間断なく白濁色の粘液が出ており、すでに左右の乳房はヌルヌルの粘液まみれで、いやらしい光沢を放っていた。

「んっ、ふあああつ……!!」

ハアハアと喘ぐ那々姫の姿があまりにも艶っぽくて、夏海はその場に立ち尽くしたまま。美少女の刺激的な痴態に、頭がカーッと灼熱する。

「藍原くん! う、くううっ……」

那々姫の声にハッと我に返った。

(助けなきや——)

いたぶられる彼女の姿に魅入られ、薄れていた理性を慌てて呼び覚ます。力の入らない下肢を叱咤し、一步一步怪物に歩み寄った。

「本条、今行く!」

叫んだとたん、怪物の触手がすさまじい勢いで伸びてくる。

避ける間もなく夏海のみぞおちを直撃した。

「が、あつ！」

腹部に鉄球を撃ちこまれたような圧迫感。

胃液が逆流した。

そのまま数メートルも吹き飛ばされ、背中から廊下に叩きつけられる。

「はあ、はあ、はあ……」

それでも夏海は脇腹を押さえながら、ふたたび立ち上がった。

腹部に激痛が走る。今のでアバラの二、三本は折れたか、最低でもヒビくらいは入っているだろう。

「化け物め……！」

人間の立ち向かえる相手ではない。

対抗できるとしたら、それは使い魔だけ。

「いやあああ……！」

なおも新たな触手の群れが那々姫の周囲でうねり、みずみず瑞々しい半裸体をなぶ颯らうと殺到する。

その光景に、夏海の中で何かが弾けた。

「迷うのは後だ。今は、みんなを守るために——戦う」

胸に浮かんだ決意を告げた、その瞬間。

かすかな光沢を放つ桜色の唇はわずかに開き、甘い吐息を漏らしている。まるで彼に触れてもらうのを待っているように――。

胸が痛いほどに高鳴る。

視界から彼女以外のすべてが消えてなくなる。

「那々姫……」

夏海はぐくりと息を呑み、思いきって顔を寄せていった。

「っ……!!」

一瞬ビクンと体を痙攣させた那々姫だが、意を決したように瞳を閉じる。

「ん、ちゅ……んむっ」

互いに吸い寄せられるようにして、夏海は那々姫と唇を重ねた。

生まれて初めての――それも懂れていた美少女とのファーストキス。

驚くほど柔らかく熱い唇の感触に夏海は陶然となった。

「ん、はあっ」

唇を離れた少女は薔薇色に上気した顔で息をついた。

興奮のためか、あるいはそれ以外の理由なのか、目じりがわずかに潤んでいる。

「こ、これは、その……」

かあああつ、と耳元まで真つ赤に染めて、彼女が口ごもった。

「キス、しちゃったね……」

夏海も胸をドキドキとさせながら、自分の唇を人差し指と中指の腹でそっと押さえた。初めて異性に触れた唇は、火傷しそうなほどの熱を孕はらんでいた。

あ的那々姫にキスをしたんだと思うと、胸がキュンと疼く。

「や、やだ、ドキドキしてきちゃった……！ あたしをこんな気持ちにさせて……もうっ！」

彼女は怒ったような顔で、今度は自分から唇を寄せた。

チュツと音を立てて、ふたたび二人の唇が重なる。

夏海が強く唇を押しつけると、プリプリの弾力に満ちた那々姫の唇が同じだけの力で押し返してきた。

「んんっ……は、むっ」

わざと上唇と下唇の間に隙間を作り、彼は勢いのまま自分の舌を差し入れる。

「ちゅむっ、んんんんっ、ちゅう、れろお……」

那々姫の舌が絡みついてきた。

初めて同士だけあって互いにぎこちなく、相手に遠慮するような舌遣い。力を入れすぎて舌と舌がぶつかりあい、ヌルヌルと滑りながら、やっとのことで絡みつく。

「んんっ、うう、む、ちゅ」

鼻腔から熱い息をこぼし、夏海は夢中で憧れの少女の舌を吸った。薄目を開けてそつと相手の様子をうかがう。

那々姫は頬をピンク色に染め、うっとりとして目じりを下げていた。

夏海とのキスに陶醉している——そんな表情。

熱くねっとりとした感触が夏海の舌に巻きつき、キュウツと絞る。

お返しに絞り返し、互いの舌を強く吸いあう。

「ちゅ、はああっ……じゅ、ちゅるう……ん、むっ……ちゅ、ふあああっ……」

甘ったるい唾液がトロトロと口内に流れこんできて陶然となった。

那々姫との濃密なディープキスに浸りながら、ブレザーを羽織つてもなお、その布地を通してタプンタプンと揺れている様はつきりと分かる豊かな双丘に手を伸ばす。

勝手に触ったら怒られそうな気もしたが、我慢できなかつたのだ。

それでも最初は遠慮がちに、ブレザーの合わせ目をはだけ、ブラジャーに包まれた胸元を露出させる。

「っ……!! やああっ……!!」

彼女は塞がれた唇の隙間から狼狽の吐息を漏らした。

ぶるっ、ぶるっ……。

ポロポロの布をまとった二つの膨らみがダイナミックに上下動した。

夏海は指先をそつと這わせて、乳房の丸みに沿ってツーツとたどっていく。

（な、那々姫のおっぱいに触ってるんだ——）

布越しにもはつきりと分かるほど、触れただけで弾けそうなほど若々しい弾力が指の腹に伝わり、興奮を煽る。触っているだけで気持ちがよくて、ズキンズキンと下腹が疼いた。

「……や、あ……んっ……ちゅ、む……ふう……」

唇を合わせたまま、那々姫が鼻腔を膨らませて軽く息を吐き出した。

どうやら、乳房を触られることを嫌がってはいるらしい。

今度はもつと力をこめて指で圧迫し、さらに乳房がひしゃげるくらいの力でつかむと、むに、むに、と思いつき揉みしだいた。

「んっ、あふ……ちゅ、ちゅう……あ、いい……き、気持ちいい、よ……んちゅ」

那々姫はキスの合間に愉悦のため息を漏らし、上体をくねらせた。

興奮を昂らせていく少女の姿を目の当たりにし、夏海もまた欲情を増す。

五指に力をこめて強く揉み、瑞々しい乳房の柔らかさと弾力を堪能した。

（お、女の子のおっぱいって、こんなに柔らかくて、弾力があるんだ……す、すごい！）
感動と興奮で言葉が出なかった。

夏海は唇を離すと、ハアハアと息を荒らげて彼女のブレザーを完全に脱がせてしまった。

その下はほとんど全裸同然だ。

先ほどの戦いでポロポロになり、布きれ同然となった生地をずらすと、真っ白い乳房をあらわにする。

「あっ」

瑞々しいバストが完全に露出した瞬間、那々姫が恥ずかしそうに身をよじらせた。

ほっそりとしたスレンダー体型には不釣り合いなほど豊かに発達した乳丘は、手のひらに収まりきらないほどのサイズ。

円錐形の見事な乳房はたわわに揺れていて、その頂点で淡い桃色をした乳首が可愛らしく震えている。

生まれて初めてまともな目にした、女の子の生身の乳房——。

夏海は感動すら覚え、魅惑的なバストをまじまじと凝視した。

「も、もうっ……!! そんなに気に入ったの、あたしのおっぱい……エッチね」

「だ、だって——」

「気に入ったのなら、えっと、その……は、挟んであげても……いいよ?」

「えっ、本当にいいの?」

驚く夏海に対し、那々姫は恥ずかしそうにコクンとうなずいた。

おずおずと彼の前に跪ひざまずく。

姫君のような美少女が、まるで奴隷のように自分の足元に傅いている。それだけで欲情と征服欲がない交ぜになってこみ上げ、下腹を欲情で煮えたぎらせた。

那々姫のほっそりとした指先が肉の幹に絡みつく。

すでに先走りの液体で赤黒い亀頭はテラテラと濡れ光っていた。

そのまま引き寄せられたかと思うと、屹立した肉刀ができたてのプリンのように柔らかな二つの肉球の間に挟まれた。

ぶにつ、ぶにゅつ、むぎゅううううううつ！ むにつ、みちいつ！

乳房と乳房の間の深い谷間にサンドイッチにされて、ペニスの大部分が柔肉の中に沈みこみ、亀頭の粘膜に熱い愉悅が沁み込んだ。

「夏海の、すごく熱い——！　これが男の子の……なのね」

「うううつ！」

亀頭から付け根まで痺れるように甘い愉悅が走り抜けた。

ずっと憧れていた、高嶺の花そのものの美少女が上半身裸になって、たわわな乳房を借しげもなくさらし、性の奉仕をしてきている。夢のようなシチュエーションが彼の胸を甘酸っぱく疼かせた。

豊かに発達した二つの肉丘を、ぷるん、ぷるん、と上下に揺らしながら、中央に乳房を寄せて、ペニスを圧迫していく那々姫。

そのたびに快楽神経を刺激されて、腰骨にまでジンとした感覚が響く。

「あ、ううっ……くっ」

生まれて初めてのパイズリ奉仕を受けて、夏海は落ち着きなく腰を震わせた。

眼下では、豊かな乳肉同士がぶつかりあって、激しくたわんでいる。

乙女ならではの弾力と柔軟さを兼ね備えた理想的な触感のバストは、一瞬たりとも同じ形を保たない。

彼女が上下に乳房を揺するたびに縦長に潰れ、横長にひしゃげ、さまざまに姿を変えては夏海の視覚を楽しませてくれた。

そうして絶え間なく変形しては硬く勃起したモノを柔らかく包みこんでくれる同級生の双丘の淫猥さに下腹をゾクリとさせる。

「ど、どうかしら、夏海……？ これで、いい？ き、気持ちいい？」

那々姫がどこか怯えたような表情を浮かべ、彼を上目遣いに見つめる。

いや怯えというよりは、不安だろうか。

常に自信たつぷりな少女といえども、さすがに初めてのパイズリに関しては不安を隠せないらしい。

「気持ちいいよ、那々姫……ううっ、も、もっと速く——」

ずきん、ずきん、と腰の芯にまで響く、下半身全体が蕩けてしまいそうな悦楽がたまた

ない。鈴口の辺りが灼熱し、とろり……とカウパーがあふれ出した。

「先っぽから何か出てきた……んっ、あふれて……くるっ……!!」

性経験のない少女は好奇心もあらわに、ちろり、と舌尖を出し、亀頭の先からじむ先走りの液を舐め取る。

ちろっ、ちゅぷっ……湿った音を立て、透明な欲望液を舌でこそげ取っていく。

「あ、ううううっ……那々姫い……んっ」

「ふふ、苦い……これが夏海の味、なのね……んちゅ、れろお……」

悪戯っぽく微笑んで、なおも亀頭に舌を這わせ、カウパー液をしゃぶる那々姫の表情はドキッとするほど妖艶だった。

凛々しい令嬢の別の一面を見せつけられて、視覚と触覚の両面から快感が高まっていく。夏海はますますドギマギとしながら肉棒の勃起を強め、表面に浮き出た静脈が、どくん、どくん、とひっきりなしに脈を打った。

ペニスの芯が火照り、爆発してしまいそうなるほど熱くなる。

「ううっ、すご、い……くふう、那々姫、もつとお……んんんっ」

「いいの？ ねえ、これがいいの……ちゅぱっ、ちゅうう……夏海……うふふ」

彼女は雌としての欲びをあらわに、亀頭部を丸々啜くわえこみ、窄せままった口でギユツと絞り上げた。

さらに竿の部分を柔らかな両乳房で挟みこんだまま、上下に激しく揺さぶる。

じゅぷつ、じゅぷつ、むにつ、みちみちいいいいつ、じゅぽつ！

フェラチオとパイズリの二重責めによる、唾液の濡れた音や肉と肉の擦れる音が重奏的に響き渡った。

「はあああつ、あ、あううつ！ んつ、すご……これ、すごい、よ……あああつ！」

美しいクラスメートから受ける淫らな奉仕に、夏海は桃源郷の心地を味わっていた。

下腹がジンと疼き、みるみるうちに射精感がこみ上げてくる。

下半身全体が灼熱していた。

熱くたぎった欲望の解放を求めて鈴口の辺りがヒクヒクと開閉し、内部からトロトロとしたカウパー液を垂れ流す。

「ちゅっ、じゅるっ、ちゅるうっ……ん、ちゅばっ……ふむうっ、んんっ……！」

生暖かい舌が亀頭のくびれに巻きつき、甘く圧迫してきた。

ねっとりとした唾液で先端から竿の中腹辺りまでがヌルヌルに濡れていく。

それが潤滑油となつて、ますますパイズリの速度が上がる。摩擦の快感が急上昇してペニスの芯を甘美に焼いた。

「ほ、本当にこれでいいの、夏海？ あたし……初めてだから、よ、よく分からない」
不安げに上目遣いをしてくる那々姫。

自信に満ちあふれたいつもの彼女とは別人のような表情だった。勉強もスポーツも、すべてに万能な那々姫だが、こと性的な体験に関しては初心で、恥ずかしがり屋で。

きつと他の女の子と何も変わりはないのだ。

「すごく、いいよ……。めちやくちや気持ちいいっ——」

夏海は胸をキュンとさせて那々姫に微笑んだ。

彼女は左右の乳房を外側から手のひらでギュッと圧迫し、その圧力を中央で挟んでいるペニスにまで伝えてくる。

ダイナミックに乳肉を揺すり、カウパーと唾液を潤滑油代わりに、じゅぽっ、じゅぽっ、とスムーズな摩擦運動を繰り返す。

ヌルヌルの体液でコーティングされた男根が、白桃を思わせる二つの乳房の狭間で何度も往復し、そのたびにジンジンとした疼きが彼の股間を直撃した。

カウパーと唾液の混合液で肉棒の粘膜はヌルヌルに濡れており、パイズリの摩擦に応じて下腹から両足にまで快楽の電流が走る。

「あ、くうううっ、こ、これっ、溶けそ……うあああああつ！」

夏海は貪るように腰を揺すりたてた。

ツルツルとした乳肌に龟头から付け根までを満遍なく擦りたてられる感触が気持ちよく

て、何度もうめく。豊かな乳肉に挟まれた肉茎が、びくん、びくん、とひっきりなしに瘻を繰り返した。

腰の最奥で、何か爆発しそうな予感があつた。

「夏海、感じてくれてるの……？　ね、ねえ、あたしのおっぱいで……」

那々姫がはにかんだような微笑を浮かべた。

頭の中にピンク色の霞がかかり、意識が甘く薄れる。

この夢のような時間をもっと味わっていたいという打算的な判断が湧くが、そんな抵抗をあつさり放棄して、こみ上げる衝動のままにすべてを解き放ちたいという思いが理性を塗り潰していく。

もう我慢できそうになかった。

我慢しようとも思わなかった。

（イキたい、このまま那々姫の口で！）

ハアハアと息を荒らげて腰を揺する。

生まれて初めて、異性から射精に導かれようとしている――。

彼は妖美な予感とともに下腹部を力強く震わせた。

那々姫の口がキュッと窄まり、敏感な亀頭に痺れるような刺激を送りこむ。

「ううううっ、イク！　イクよっ……！」



亀頭を覆う圧迫感は今までの比ではない。

屹立したものを先端から根元までねつとりと包まれ、濡れた膣粘膜の熱い締めつけに、それだけで達してしまいそうなほどの快感がこみ上げる。

同時に彼の腰にまたがっている那々姫が、力を失ったように上体を倒してきた。そのまま顔を寄せてくる。

「な、那々姫？」

何かをねだるように、少しだけ突き出された唇がプリンと揺れる。

「夏海……ん、ちゅ」

ゆっくりと近づいてきた唇が彼の唇にそつと触れた。触れあつた唇はかすかに痙攣していた。

（那々姫……震えてる）

彼女は夏海に出会うまでの間ずっと一人きりで戦ってきたのだ、と今さらながらに思い返す。そんな彼女の不安と怯えが伝わってくるようだ。

同時に、今まですつと近づけているようで近づけなかつた彼女の芯の部分に、ようやく触れることができたような気がした。

（そうだ、俺が那々姫を守らなきゃ——）

それは以前のような外面を見ての憧れではない。

一緒に過ごしてきた数日の中で芽生えた絆。
そして何よりも――。

完全無欠のお嬢様に見えてその実……心に闇を抱え、もがき、苦しんできた『本条那々姫』という一人の少女に対する恋心。

「大丈夫だよ……俺が、那々姫を守るから」

「あたしのこと、恨んでないの？」

那々姫が不安げな顔でたずねる。

眉根を寄せた顔は、苦しみに耐えているようにも、涙をこらえているようにも見えた。

「あたしが……夏海を戦いに巻きこんで、利用して……なのに、夏海は」

「遅かれ早かれ、戦いには巻きこまれていたよ。俺は――使い魔なんだから」

夏海が力強く告げた。

「那々姫と一緒に戦えて、今は嬉しい」

「うれし、い……？」

「だ、だって俺……那々姫のこと」

使い魔の少年は小さく息を呑みこみ、告げた。

「懂れてた、から」

「あ、あたしだって……夏海のこと、好きだよ。だから、ずっと一緒にいてね」

魔王候補の少女が小さく微笑む。

「やだ、えつと……だから、その……そうパートナーとしてだからね！ ドレイとかしもべ的な意味よつ！ へ、変な勘違いはやめてよねつ！」

顔を真っ赤にして弁明する。

「……分かったよ、これからも那々姫の使い魔でいる。ずっと守るから」

「や、約束、だからね……」

ますます顔を赤くする那々姫。

そんな彼女が可愛らしくて、夏海は思いつきり乙女の内部を突き上げた。

ぐちゅつ、ずちゅううつ！

破瓜の血でヌルヌルになった膣内を太いペニスが勢いよく滑り、張り詰めた亀頭で最奥をノックする。

「あ、押し上げられ、ちゃうつ……んっ、はあああつ、あんっ！」

那々姫は赤い髪を振り乱して喘いだ。

血と愛液が混じりあつて膣内を潤し、それが潤滑油になっているためか、想像したほど那々姫は痛がっていない。

これならもう少し力を入れて腰を使っても大丈夫そうだ。

夏海は初体験の緊張の片隅で、自分でも驚くほど冷静に那々姫の様子を見てとると、少

しずつ腰の動きを速めていった。

「あっ、奥まできて、る……ああっ、しびれ、ちゃ……はあんっ！」

強く押しこむたびに、亀頭の先端に柔らかいゴムのような感触が当たると、おそらくは那々姫の子宮だろう。

キツキツの粘膜に締めつけられる快感と、亀頭に触れる子宮の心地よさを同時に感じながら、夏海は下腹を突き上げる。

腰を深く繰り入れて、ごっ、ごっ、と突いていくと、那々姫の全身が痙攣するように震えた。

「や、だあ、へんになっちゃ……あああ、夏海っ、夏海い……んんっ！」

彼女は不安げな声を漏らし、上体を倒して夏海の体にしがみついてくる。腰の辺りで悪魔の尾を模したパーツがビクンと跳ね上がった。

「那々姫……那々姫っ……ん、はむっ」

「ちゅ、ううっ……んんっ、夏海……もっ……もっ……もっ、してえ」

熱烈なキスを交わしながら、互いの腰を打ちつけあう。

セックスが——大好きな少女との肉の交わりがこれほど鮮烈で、これほど心地がいいものだとは、想像をはるかに超えていた。

那々姫の最奥に深々と突き入れるたび、キツキツのヒダに包まれた肉茎が快楽で蕩け、

溶けてしまいそう。

うねうねと波打つ膣粘膜はピストンを繰り返すたびに、徐々に生硬さが薄れ、柔らかく蠢いては、夏海の分身をくるむ。

そして鋭敏な亀頭や竿を、ぎゅううううううつ、と食い締めて、ペニスに存在するあらゆる性感を嬲り、刺激してくるのだ。

「ううつ、ちゅ……な、なんて……んむう……すご、い……！」

夏海は彼女の唇にぴったりと塞がれた唇の隙間から、肉悦の喘ぎを漏らした。

下腹を中心に熱い衝動がこみ上げてきて、体を内側から疼かせる。

放出の甘美な予感が、きつい膣孔に包まれたペニスをジンと痺れさせる。

「気持ちい……ちゅ……の、なつ、み……んんっ……ちゅ、ちゅうつ……あたしの中で……はあんっ……気持ちよくなっ……んはぁ……くれる、の……？」

ちゅっ、ちゅっ、とつえばむようなキスを繰り返しながら、那々姫がうっとりとした顔で喘いだ。

いつもの勝気な少女とは別人のように、甘く蕩けた表情だった。

目じりが下がり、唇が半開きになり、快樂に浸りきった淫蕩な顔。

膣肉がまるで別の生き物のように蠢き、夏海の生殖器官をまさぐってくる。心地よい締めつけに腰骨が甘く痺れる。

海綿体が膨らみきってパンパンに張り詰めた男根はもはや爆発寸前だった。

「ううっ、も、もう出そ……んんっ、くうっ！」

加速度的に高まっていく肉悦に浸り、夢中でピストンを叩きつける。

じゅぽっ、じゅぽっ、じゅぷっ……ぱんぱんぱんっ！

先ほどよりもこなれた膣内を深々とえぐり、張り出したカリ首で粘つく膣壁を擦りたてた。

(このまま那々姫の中でイキたい——)

甘酸っぱい期待感が胸を疼かせ、膣を内部から拡張させる勢いでペニスをさらに膨張させる。

薄く目を開き、上気した顔で夏海を見下ろす那々姫が愛おしい。彼は下から両腕を伸ばし、しなやかな上体を抱き寄せた。

「ん、ううっ！」

半ば強引に彼女の唇を奪う。上体を重ねあい、熱烈なキスを続けたまま、下から腰を押し上げて清らかな膣を存分にえぐり抜いた。

じゅぷっ、じゅぷううっ！

結合部から泡立った愛液と破瓜の血が混ざりあってこぼれ、地面にピンク色の液だまりを作り出す。

「お、俺、これ以上は……我慢できな、いつ……！ ああつ、気持ちいい！」

「あたしもっ……あたしもおっ！ 夏海い……んっ、はああっ……い、一緒に、気持ちよく……はああつ、あんっ……なりましょ……？」

可愛らしく懇願する那々姫の可憐さに、夏海は欲情を煮えたぎらせて、下腹を突き上げた。

最奥まで突き入れ、張り詰めた亀頭部で無垢な子宮を押しまくる。

ぎゅうっ、ぎゅううううっ、と収縮する膣内粘膜にペニスの先端から付け根までを満遍なく締めつけられて、甘酸っぱい快楽が四肢を痺れさせた。

下半身を中心にふわふわと浮き上がるような陶酔感。

那々姫の中に、欲望のたぎりを思いつきりぶちまけたい――。

夏海はどう猛な雄の本能そのままに、ラストスパートに入った。

ぱんっ、ぱんっ、ぐちゅっ、じゅぷっ、ぱんっ、ぱんっ！

互いの腰と腰、太ももも太もものぶつかりあう音と、ペニスで膣壺をかき回す粘ついた音が重なりあい、淫猥なハーモニーを奏でる。

「あああつ、あたしっ……あたし、もお……だめ！ 来てっ、夏海いつ……！」

那々姫は真紅のツインテールを激しくはためかせ、しなやかな上体を思いつきり仰け反らせ、エクスタシーの絶叫を上げた。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なる。未満の方購入できません。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!



三次元エロコミックマガジン

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!



魔法エロコミックマガジン

フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!



Prism コミックプリズム

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!



メガミクライシス

詳しくはKTCの
公式サイトにて!

キルタイム

検索



書店、書籍通販サイトなどで好評発売中!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉



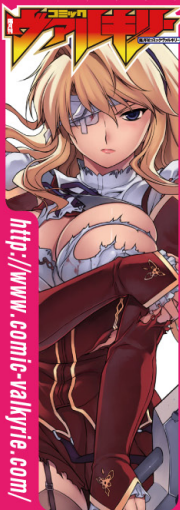
電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!